

柳菴栗原氏編

先進
繡像
玉石雜誌

東都書林
知新堂發兌

河合氏藏書

玉石雜誌序

友人栗原君伯任後書好古最精本
邦典故又喜台人肖像其秘於神祠
佛宇者百方探索不遠千里必往觀
之親輒摹搨焉積年之久得凡七百
餘人自王公貴權以至緇侶工商婦
女皆靡不有也頃者摘著元弘以降
數人將鏤之梓又舉其事實可據者

國華

以係小傳。或摹其筆跡。或圖其居室。器什及戰處游蹟。以附之。而不擇其賢不也。乃命曰玉石雜志。謁余序。展而觀之。古人顏容宛然在目。又讀其傳。足以畧知其言行心志。乃使我得文數百年前之人於一室中矣。夫交也者。昉於識顏容。而極於知心志。其於古人。則宜就史傳以求之。史傳能

記其言行。而心志亦可知也。獨其於顏容。則不能髣髴焉。是史傳之所以有憾也。今伯任之著。以傳其容。為主。此則亦足以補史傳之闕矣。或謂此編不擇賢不。殆亦泛焉無益。余謂不然。覽者於其賢者。效而則之。於其不賢者。鑑而自警。則不賢者亦未必無益焉。詩云。他山之石。可以攻玉。此

之謂也。夫如此則伯任之志伸矣。乃書以為序。

天保十四年星次癸卯六月中澣

藻海川田興撰



練雲紀能書



序二

先進繡像玉石雜誌卷第六目錄

北條相摸守平高時朝長肖像并傳

御後見 加合判 將軍家政所別當

督總領 吉書始

邦良親王 乘基法印 并真蹟三部華嚴經跋

常盤駿河守範貞 鬪犬畫 田樂

刑部少輔仲範 二階堂貞藤入道道蘊

北條左邊將監泰家 金澤修理大夫貞顯 公實時

清原教隆 太田勘解由判官康育 後教壹岐守

藤之品茂範 無外如大尼 金澤顯時 藏書印

鎌倉古圖 竹御所圖 寶戒寺 貫高

德崇權現神影

寶戒寺安置

信克敬寫



六ノ目

北條相摸守平高時肖像

寶戒寺安置



北條相摸守平高時朝臣ハ相摸守貞時乃嫡男一々母
 ハ秋田城介義景乃二男大寶三郎景村の長男太郎左衛
 門尉泰宗乃女たり貞時の母潮音院尼嘉元元年癸卯乃
 歲鎌倉小町の家ヲ生ふ其頃父貞時ハ執権を相摸守師
 時ヲ讓リ我々を出家ニ最勝園寺入道宗瑞と稱シ一
 山禪師ト曰毎々相者ニ綿密乃ニま乃暇ヲハ天下乃政
 理を大事ト思ヒ終け奉リ終年之十三歳ニ及ルニ至リ
 男子を儲けハ成壽丸と名付テ掌中乃珠のニトク
 鍾愛せらる生長乃程を以テ之と待色け奉リ應長元
 年十月廿六日貞時入道ニ十一歳ニ及ルニ至リ世を早く去リ時
 成壽丸ト稱スルニ九歳ナリ後々を内管領長治入道國直

と秋田城の時顯と心を合シ貞時入道乃遺云ありと
 幼稚乃成壽丸を以テ執権ニたテ武藏守泰時より以テ
 嫡々相傳乃家督を継ヒんと外々忠信を専スと云共
 内々面々の私欲成逞ニクホカニハ為ありトハ知人交
 子ホカウリけト

治承四年北條口郎時政前右兵衛左頼朝卿乃義兵を
 揚々乃馳外々武威を以テ驕奢を志リ擡け節儉
 主々朝憲ヲ奔走せシヨリ海ノ
 指揮ハ靡々万民ヲ業を楽シテ衆ト成ト水ト舟ト
 乃心を一ツシ太平ノ風化を致セトハ極トシ其
 身五位乃受領ト過テ嫡子義時ホ續テ將軍家を補

佐一承久乃擾亂を鎮めしより後々そ乃勢ハ漸ク強
大入あり藩上掠奪の色を立し子嫡子武藏守泰時よ
くあを匡救し海内無為乃政を仰き身口不乃上
階ふましくそ廿年天下乃執権を全くと義時卒して後
泰時乃遺跡を相續まとい魚と性質恭侯ふし
天下を私き以叔父相摸守時房泰時小長まを奉て
加判きむ將軍執権次第了泰時父の譲りまき御
ひそ中の仰をうけあゆより後々例と御後見と加
合判とあし以二人し將軍家政所別當たりし
あり東温建久二年八月八日將軍家政所始ありし
郡業令ハ民神サ並後京政業主ハ後井後長秋叙事
ハ中原光家とあり其後文曆二年鹿島朝秀了賜たか

御下父將軍家政所下平輔秀と別當相摸守平朝
長判武藏守平朝長判とあり時房泰時乃二人なり
別當と執権とハ世人乃各分し不し將軍家政所
見とゆ稱泰時と弟乃朝時重時政村等小罪量子
任き別當加合判を讓補きむ魚と志よりは
嫡流ハ以別當を私とへしとさらハ別當たりぬ時
乃堪忍ふとく督總領と云領所を別と嫡流了傳え
志ありあは後嵯峨院乃長満堂領を後深草院乃御
流了傳え勢らと符を合きふと計とけり
督總領とハ家督總領乃上下罷きおろけり徳宗と
小書たるあり是ハ宗家乃徳幼と云を罷きありその
領所ハ若狭國の守護職駿河國入江守等を云高時亡
ひそけりハ熊裏の供所料所りり罷きとあり
志の秋時ハ成考乃幼稚乃從ハ督總領を相傳し泰

時乃遠慮を仰ぐへき小長崎入道圓喜お乃也一人
榮花乃誘らんとも幼主を輔佐する道を失ふ九代
相承乃繁昌を槿花一朝乃露黄梁未熟乃夢と醒き
責そとく誰の課きく九原乃苕の下小泰時朝臣を
見るへけんや

正和八年七月十日成壽九十に歳ふくく元服し後位
下小叙し九馬権頭し任し相摸守基時不代く御後見不
補きらふ基時乃泰時乃弟小相摸守重時の曾孫彈正少
弼業時ふは孫みく新別當時兼乃嫡男たり年高し思慮
深うりくは諸人安堵の思をあげけふる急し職を止
らせし何事や聞よの身を塞き見人眉をひそめ

冷笑せぬ人あそかり里々也

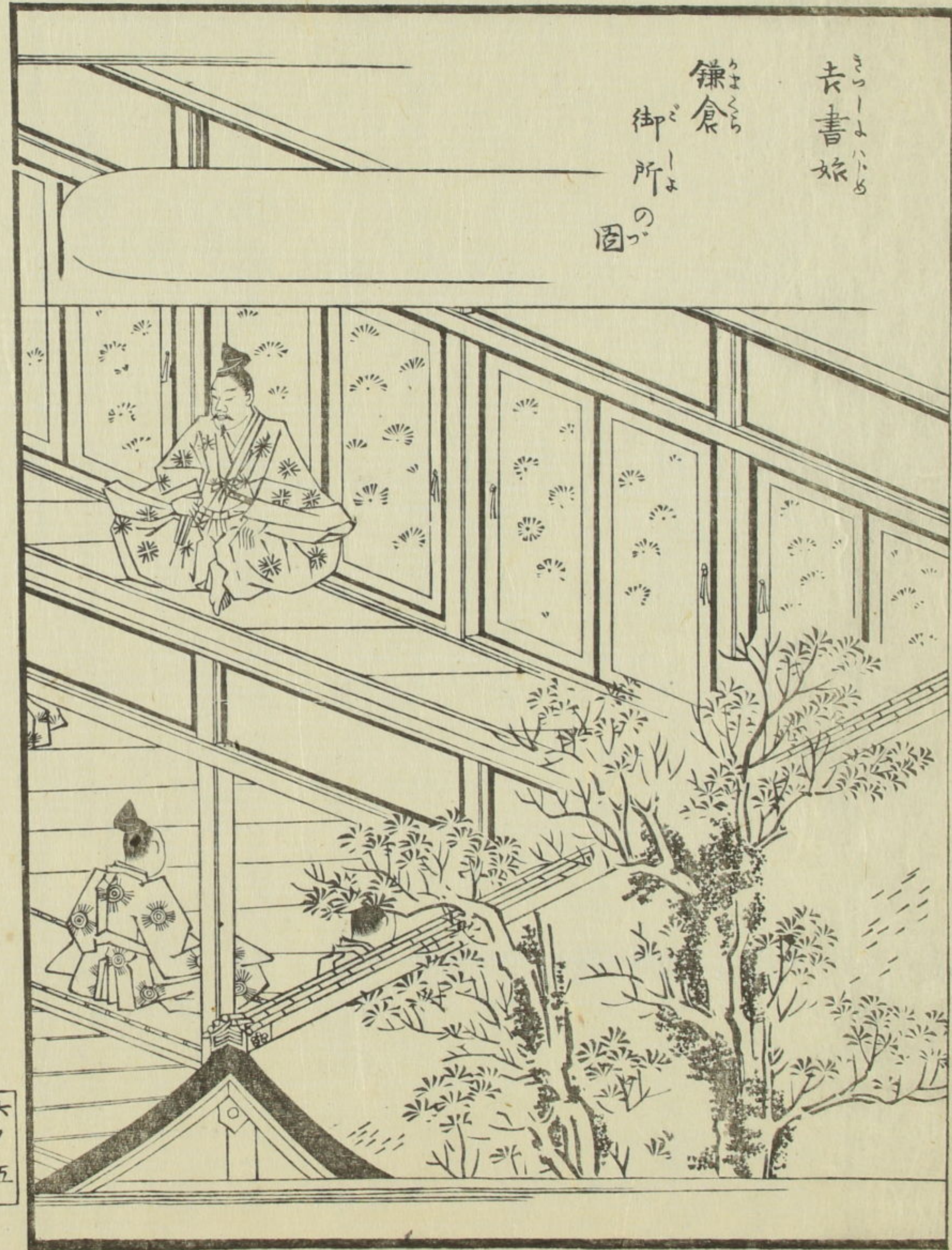
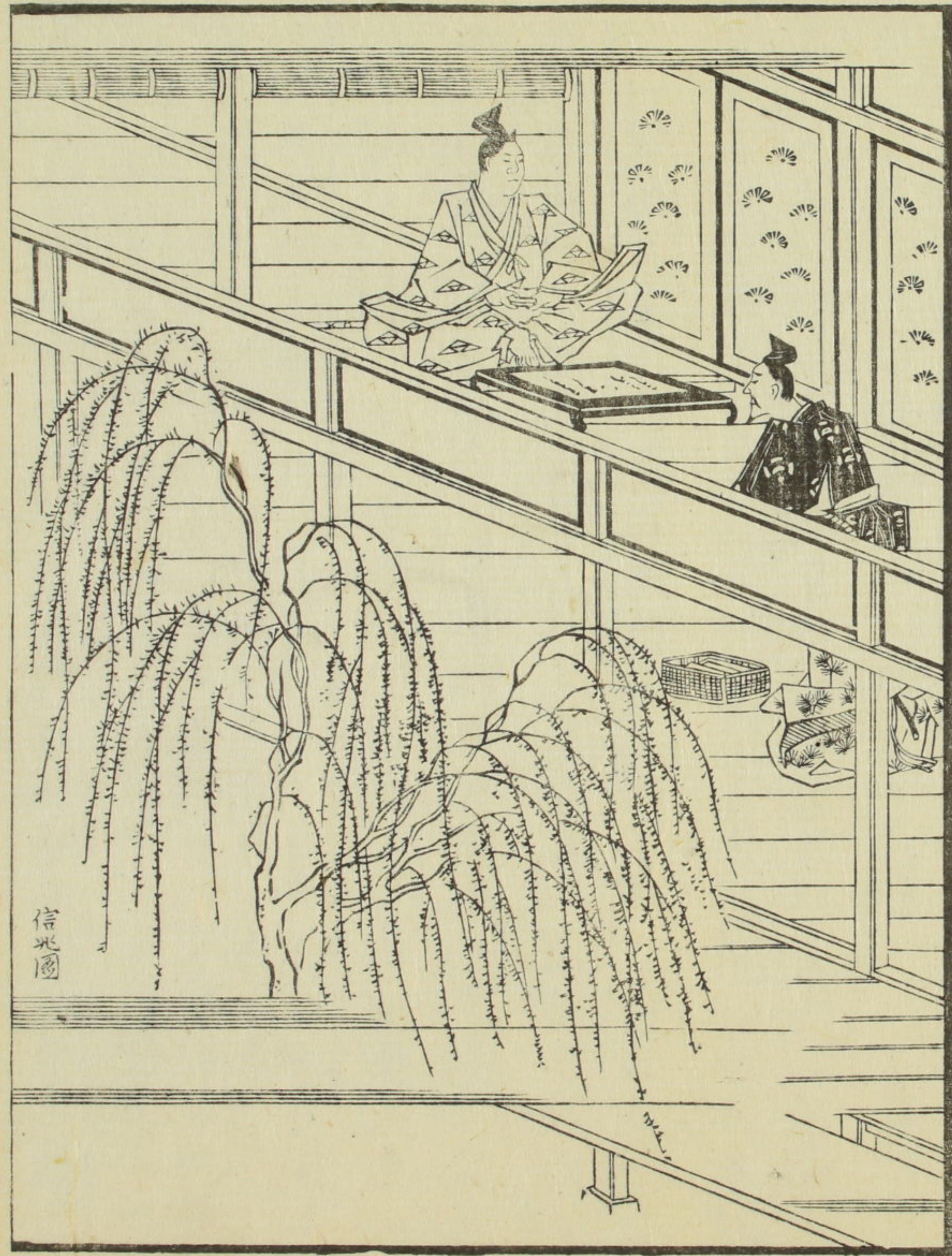
義時ハ四十二歳みく後位下小叙去其子乃
位下小叙し其子の泰時ハ三十に歳みく後位下小
十七歳みくく正位下小叙し其子乃時氏女八歳不
て父小先たるく早世し嫡孫經時女一歳みく後位
下小叙し其弟時頼十七歳みく後位下廿五歳みく
て正位下小叙し其子時宗十に歳みく後位下小
馬権頭たり其子貞時十に歳みく後位下小九馬権
頭みかる時宗貞時乃先例みよつ高時より十に歳
みく後位下小叙し九馬権頭し任きかり時政

義時泰時ハ晩く又位ヲ昇ると云と小時政七十八歳
義時六十二歳泰時六十歳の壽を保川時頼より此
早く榮爵を賜ると云と小時頼世七歳時宗世に歳
貞時に十一歳あり世を多く以父兄乃勢不席と義
官とふるハ人乃不幸なりと程伊川乃歎きく小可ふ
お里了抄理ハちくふきふや

同六年二月三日改元あり文保元年と云左馬権頭高
時相摸守了任を三月八日去書始あり

東鑑 卷十 建久二年正月十八日甲子乃條小政所去書
始を初ハる前小御家人恩深小俗を承の時或ハ所判を載
ら也裁々奉書を用ふら致而了今羽林上將了備り

め給ふ乃間沙汰ありて彼状を召返一家所下文小成
改めら致趣き名を定められ 右大將家政所御下文と云を
政所別當前因幡守平朝長廣元令主計元後原朝長仍
政案主藤井俊長 藤田新 知家事中原光家 宗平 小 有
あ也録倉幕府少く去書始仍之 澄觸と云へし
後世乃書か也と成氏朝長年中仍事小所去書多合
二日形り但日限不定関東御分國々を治せ也執事代
を召具く政所出仕あり所判あふ趣き物をは執事代
持参御硯をば政所乃子息持々来ら致時御判あり
その後少く執事代系御判物を賜う致と見たりかと思合
せく去致へし



同二年二月廿六日京都小倉御讓位の事と持明院乃任
洞子遷御す備へ太上天皇ありあはせおと備以寶篋三十二
世より新院と稱し奉る 持明院の仙洞了後伏見院乃
以即新院の父帝みけらせり外了後宇多院と稱す後
花園院とありあはせあり東宮御位より即せり也 冷泉萬里小
路乃内裏ありあはせ御歳三十一後宇多院第二皇子
より後醍醐天皇乃御事ありあはせは故相摸守貞時乃御
位の後深草龜山兩院乃御流ありあはせ御即位
治世を十年のいと議らひしきり故あり又後西園寺
太政大臣 實魚 の所女藤原嫡子東宮乃御息所と聞えり
をまぐ相摸守乃議らひしきり此年四月從三位より七月

女御とあり明る元應元年八月三日中宮より上り勢あり
あはせを愈々相摸守西園寺乃家を鼻負他了殊あはせは君
も高時より心をとり勢あり愈々慮も備へし川ら奔又
當代の龜山院乃御孫あり後宇多院乃寵愛の皇子あり
おとす勢は後嵯峨院乃御遺詔乃如く去り乃御流あり
皇統を相續せし勢あり愈々御事あり御理運子御座を
これより三宮を東宮よりありなるへき由を高時へ勅詔
有りあり高時更み肯ひなり以後二條院皇子 邦良親王
を東宮とありなる 後醍醐天皇の高時を謀まへり
邦良親王とありなる 後二條院第一乃皇子あり後宇
多法皇の御孫ありあはせら勢あり御母乃冬儀宗親卿の

女宗子正安二年庚子歲誕生す海一乾元元年三歲不
親王とあり勢ふひ徳宗三年後二条院崩す勢ふひ
時後宇多院を以て宮を所位すと名付しと由相摸守
貞時ひくく東宮を所位し即ち多かへ中を強く奏聞
せしむは慮多し由位せらるるなり
是後宇多院
の鎌倉を討
へくあやう立せしむは以て宮を常盤井殿ありひ大覺寺
乃所新子供ふは勢らせりし永赤門院瑞子乃養
親とあり勢らせり
瑞子ハ宗尊親王乃所女不
元年後宇多院乃宮入り所す海一直了院野難らせられ
元徳元年八月廿九日御年五十八歳不崩所なり
す仁和寺乃木寺といふ事らせしむひけしむ本
寺宮と由中す詩歌管絃乃道を好す勢ふひひは

其道り携たる人乃事らぬはありけり一年間白刃
下頓阿法師かと休かた勢ふひく家花懐舊とす人
け宮ありし海を給ひける時頓阿法師
物おりのかゝりしはいし花のいし昔乃哀しさを
と詠きし由徳宗乃末踐祚あか危うりし由乃不ふ
かく打こ免らせしむる海を意乃危うり念めらふや
花園院沙印位ありし時東宮たつと給へりし
を以て後宇多法皇と名付し所宮法皇才を儲貳不定め
らせし所宮へ所位乃後以宮を春乃宮りあさせ給へ
と約てらせしなりなりは文保乃今ふりし
二月九日御元服ありし御名を惟善と或ハ惟良中
又ハ惟嘉中

後了邦良と更めらむし一之孫也と由主上後醍醐天皇元來
伯父佐乃所中むひすくありま少なきゆり一宮尊良親
王文保二年十一月三宮尊邦親王文保二年十一月續くすゆきを
坊すの定め終るとおしめされし小後守多法望
乃兼く定め終せらむし約と高時より拒まざるか故
了東宮より之を終ひき終ふも主上所歳まゝく二十不
餘ら終ふひ内すの仁意乃聖恩深く口海了及せし年
あをを思食也外ふの文武乃善政遠く六合了施され
多終こと前代幼雅みく残存すゆりけふ時おたる
去りば鎌倉乃奉約頭人目を例め兩六波羅山いふせき
こふ思ひたり元弘乃亂乃去り乃こから元亨元年十
臘と云へり

二月九日後守多法望大納言兼東定房を所使みく今
まゝ仁洞あり万機乃政務を聖躬ありつと由群臣乃
奏後及くもまて終ひ薰修乃善政を妨たくること敵愾
不獲のありし向後一向の計ひを承へる旨
高時へ仰遣はされはあむし主上記録所へ出仰
ありく万民乃愁訴を聞食せけりゆりあむ法皇隠迹
乃云郷々急し時を失ひて窮猿乃林より走るる如く今
上拜趨乃百僚と蛟龍乃雲雨を得く終るゆりた
東宮乃所せり成かなそりとゆり馮と兼らきく前大
納言兼原經繼郷中納言源有忠郷右衛門督教定郷左
衛門佐俊顯等朝くれ伺候去りけり正中元年後守

多法皇崩御の後主上東宮を廢し系らまを御さすを
 思食たせり色けかろ高時東宮不廢しなまへを御
 失おろしゆまんとく勅定を違ふまを色け色ハ高時を亡
 不さくやと類し殿慮をめぐらされり嘉暦元年三
 月廿日乙丑東宮薨せ勢終ひふは殘祚程遠く候と待
 福ひせし人々を憐れ心殺しし出家遁世を致すの三十
 餘人とかや松殿大納言基嗣卿乃三男了乘基と云人
 あり幼稚より東宮の伺候せし御事あり候ハ西公
 乃梅尾了引翁に御善提乃夫免了寫注しありしと云
 時より十八歳とそ其真蹟の華嚴今猶梅尾石水院に現
 存すと

三部華嚴經跋

梅尾石水院藏

嘉暦才了曆黃鐘下旬復前坊の御
 善提奉書寫し時也繩床樹下清嵐
 冷石水院前白雲深

嘉暦年藏

七子首侍青宮新宴獻詩等
 々志抄西山隱居菴室の内善提奉書

写付典懐舊忠亭嘉永渡水林寺
 奉轉後人必之て有也

七年乃昔とは元應二年を云乘基も其時十二歳ありて
 東宮の新宴侍りて詩歌を獻すと云ハ其風惠も
 知へし繩床樹を柵尾ひりあり明慧上人乃坐禅さら
 せし松樹をり石水院ハ繩床樹より慧乃方りあり建
 保乃末了結構せりまほく六百年の早霜を徑く今も
 全く傳へし其靈場なり乘基のちハ仁和寺も後ハ功德
 院法印乘基といひて是なり

元應二年八月廿四日都乃守護とて六波羅の北方に在
 けり越後守時敦のりそりの地乃あり地とて打臥ける終
 り暮る見かゝり約年四十とて其後ハ南方に在ける陸
 奥守維貞一人に事執りて何事をや思出けり
 元亨元年七月三日俄に鎌倉へ下向せり高時此に
 賞就もかゝりて五日鎌倉を去りて上洛を
 高時此に十九歳あり強く成敗す意あるもあるは但し
 長崎入道圓喜をよみ秋田城介時顯等も互に權を弄して
 代里とて上洛せり此方より居る心
 範貞ハ義時乃之男極樂寺入道觀覺相摸守重時の之
 男を塩田駿河守義政とて信濃國鹽田を領しつとてハ之

鳥羽僧正畫鬪犬 柵尾山藏

鳥羽僧正
 覺猷ハ保延
 六年九月十五日
 八十八歳没
 入藏于柵尾山
 保壬寅より七
 百三年前了
 あくろ
 相摸入道の
 弄び鬪犬
 やる類み
 大人の態
 ありぬを笑入
 ありぬれい
 了柵出



六ノ上

一 尺 七 寸 八



紙 豎 一 尺 四 分

接縫 高山寺の印
 上下小二の捺

分 五 九

義政乃長子を備前守時範と云時範乃嫡男と云ち
範貞あり鎌倉乃常盤了住しけしハ世人ハ常盤殿と称
せしなり

高時まゝ北条英時を以て筑紫乃探題として筑前國了
まゝ下り博多了居く九列乃成敗を掌たりしむれども長
崎入道圓喜の年久しく高時の家事を專ふしく私欲を
恣ふせしと誰い入と云く高時乃取入しハ圓喜の職
を停めては郎左衛門尉高資を内管領に補て高資より
奢侈不長く國家を治むる道を志す以て偏り己の心を任
せし振舞けしハ万民ハ愁訴を述るる便なく外揆乃然
士ハ常不恨を會し憤りて懐き目さぬしと不思をぬ

人出せかうりけし高時年ややく弱冠了及くたゞ日影ハ
酒宴遊興を事し儉約を以て九代乃采華不習くハ百
姓乃艱難を以て或時太乃を立り闘入を以て興ある
しふおしハは則法必へ相ふし或ハ正税官物了募
りて犬を尋ね或ハ推門高家子仰きて乞を求めける間
由く乃守復國司初く乃一族大名十七女之飼之鎌倉
へ引進以路次みくわ行人馬より下里野路みくハ農民
まろあくかゆく鎌倉みくハ月了十二夜大会を乃日也
定め一門内外揆乃人々堂上堂下り座をつねく見
物をんあ人々思くあしおりハ夕くと其具頂都子
回樂を弄人々と聲ありと聞く高時まゝ新座奉定の回

樂をうひ下しく日教朝暮おれり着き賞就乃あまり
 田楽法師を一人けり大名に裸きき装束をいさしをける
 間まけり芳りといとそり全浪珠玉をたく掃く後
 羅錦繡を粧ひ驕奢淫分不超過きり
高時ハ元弘三年三十一歳ふく自殺せり
 高時ハ元弘三年三十一歳ふく自殺せり
 田楽乃ち兄を定りあり孫とも嘉保二年岡白教乃
 母儀の頼三共條子芝田樂といふとそり承長元年の
 夏濃陽り田楽乃ちやそり云郷教上人まきお世を弄
 そ金教より大江匡房郷乃記ふ見たり高時より凡
 二百に六十十年系不代を興とせしむくそり水か人
 もありしあり

或秋一献乃あまけるる田樂ともの栞子といつと難と殿
 をとけり天王寺乃やそりれりを尼とやとそりける是
 と障子乃ひまより見教り田楽とものと見えりるハ是類是族
 乃妖物ふくはそり鉤り生一人も人ふくハかうりけり
 とかや後日ハ南家の儒者刑部少輔仲範
大蔵冠録是の孫武智乃乃子孫
 を輔家と云武智乃十に代大寺改考範乃長子後三任ハ事代傳
經範卿乃二男刑部卿明範卿の初乃名を仲範と云
 開く天王寺造より天下の勳亂出来て五苑敗亡を金と
 前北あんと云ける果しく思合をる世と成りけり後
 不高時ゆふ政通り人を利ひを長崎高資まき驕子長
 志賄賂りふけりかは陸奥國の津輕乃任人安東亮惣と
そのうちそり長と鎌倉子新伝とるそり有ける高次負了篤く
 そ一族季長と鎌倉子新伝とるそり有ける高次負了篤く

賄ふく下邳を待ける入高資両方より過分財寶を
たふりしりく理非乃決刃徒子日をまね月を越しふより
兩人新征子退屈し津彦し海り一味與力乃去としを振
集め合戦し及人高時兵をつりて乞を討平けん寸と
いふとも安東り勢つりく勝とあてん

承久乃むりい一院乃叡慮くく入畿内丹波丹後紀
伊但馬伊賀伊勢伊濃尾張近江十国乃兵共り馳集
て北条義時を討亡さんとせしち東海東北陸奥の
勇士十九万余務りか心をいひあり上洛きかハ十四
国乃兵士一日ゆあらしん殿走し頭をのぬく軍門子降
り轍魚乃命を惜むりためり万代乃慚を忘れたれん

いふと云ふ昔日本国乃兵士之年乃大番くく京より
せり歸る時りハ力盡く歩蹴りく下向し教を右大將
頼朝卿乃哀せし世終ひ六ヶ月りゆめて各々分限乃
榮耀を樂しゆせらるし恩を思入り故きり元亨乃今
ハ其分限乃榮耀を奪ひく樂しゆきハ其安佚を勞せ
志欠く苦を去りせ教ハ何き安東ハき勢る大名子非
と云ともつ後藤倉の下邳を背きしり終り海内及覆
乃形をかハと秦乃亡んとしり時り陳勝を成卒の賊
きふ起りく漢高乃嗚矢と成り似り
正中元年秋乃頃主上後醍醐天皇北條家を亡りく公家一統
乃政を致せんく迎侍乃云卿子作合されけるといふ

あくる漏たりらん高時より入るは日野中納言資朝卿
義人頭後基朝長を九月廿三日鎌倉へ呼むる巻院の志儀
を紀さんとせしふ同女に日中納言宣房卿勅使とて鎌倉
へ下向ありて夜翰乃誓書を下させけり高時去の時年
廿二何事乃深く慮ゆかく萬事ハ長崎高資より計らひて
誓書を及秋田城介不請取を則ち書を披らんとせしを二階堂
出羽守貞藤より練る封のより勅使を返し進らひへき由
とせし

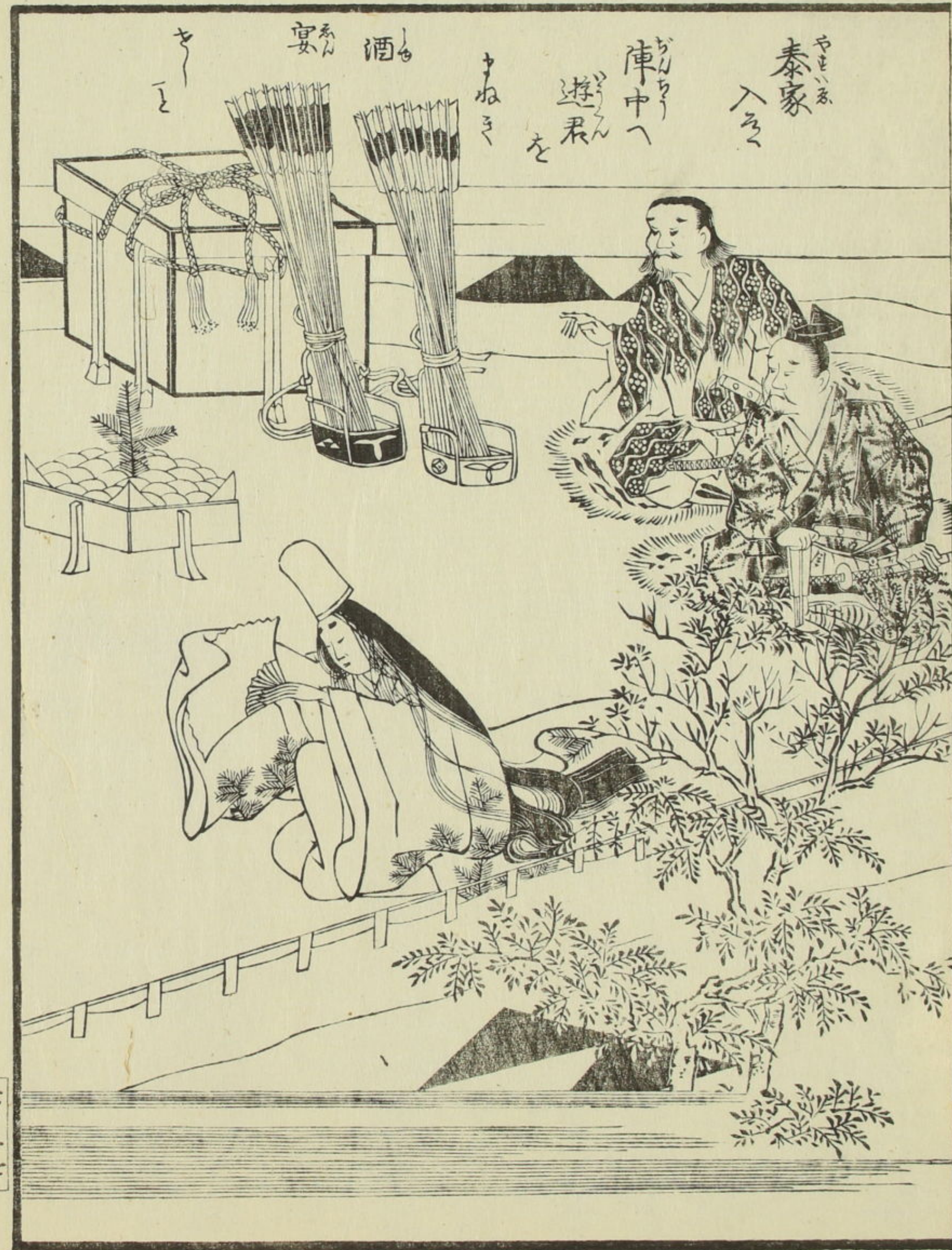
二階堂貞藤ハ大織冠鎌足云乃孫九太長武智麻呂の四男
冬儀治政卿乙麻呂ハ代遠江推守為憲云に代後河守維
遠也也二階堂家乃祖より維遠ハ代出羽守行藤入道一

て道我と云則貞藤乃父なり貞藤正應元年戊子乃歳
鎌倉ありける母ハ平賀左衛門尉惟時女貞藤才學を以
て世子賞せらるる檢非違使を補し出羽守を兼西中之
年高時と共々薙髪して出羽入道道蘊と云時ハ廿九
歳言時より長きふと十六歳より大なる匡救乃力を盡
せと云とハ大履の顔れんとせふ一本乃支ふる如きあり
孫ハ吉野合剛云乃討つる向ハ大塔文を言授けりる震め
事りしふ元弘恢復乃時宥怒を蒙りり本領を安堵し
たりし謀教り座きりり練せらるる約年に十六
歳長男兼藤九衛門尉ハ城守たり次男知藤九衛門尉之
男兼義新泉守ハ男仍遠九衛門尉ニか子孫あり

長崎高資をき教てやある封を削きて拜見せしむるといふ
然るに遂に拜披せしむるに定まりて齋藤利行あまを後を
見けるる歡心偽さる知天乃照覽子任をたとむるに色し句
子聖く忽ち問絶しき野しく血を吐くけ色ハ高時大不恐
朝廷乃御事武家いろひを承へしふあはしと復奏しき勅
使ハ上洛せしを五人かき資朝卿をば依源國へ後して
本間々館々押發後奉扨長をば京へ還しけり同二年の
春當時廿四歳重病より去り執権を辭し二月十三日薨
あく法名崇鑑と云長崎田原金澤修理大夫貞顯と親しく
せしより貞顯を以て執権とふは時ハ高時の弟泰家ハ
孫くは先時より代りて執権くはしきもの我あてりと

思ひ居るくし不し世を憤くおふく出家入を法名ハ
慧性初年廿歳とそ

泰家小字は口郎高時因母弟と初名ハ時利元通衛時監
不任と元弘三年名越高家久我暇に討死し足利高氏官軍
にありぬと聞き時義元と型等六國の軍兵を借得て人
を大將ふて上洛せしめんとせし新田義貞武義國へ打て出
去るに先新田を追討し後子足利を討るへし泰家入
道義義元と新田と合戦しけふハハ泰家打勝と云
とハ終に打負く泰家鎌倉へ逃返すハ義貞續く責寄
りく乃金銭利なく高時葛西谷へ落し逃ハ泰家ハ打て
奥列へ落しちし上洛し西園寺公宗乃家不仕り刑



部少輔時興と名字を改め北條家を興さんとして謀
つしふ事ありて後々建武二年乙未謀せり進しハ時興
ハ中ノ何地ヘリ逃去らん終子ニ行末をうらんと云 信元
泰家乃執槍を得さふを怒り出家せりハた執槍乃雷と
勢とを貪る乃其人とを考入る義貞を武蔵子
の掌を逃さる女志急王遊女を陣中子迎へて賊
と王を逐ふ遂に彼乃為了前驅し兼倉子入兼倉不
あくハ時を不徳なり云く共死を以南都景家保
匡衡を伴入く與列へ落しハ智あふる似く進し
入く公家了與く公家の刑せられを余所了るく進去
去を之を性思ふく恨憎た死を惜むのく是雷貴不
出長く教ふ時を器也ゆゆの後の戒とあはへし
高時入道病愈く去を閉て大ら怒り貞顯を殺さんとい
貞顯おきさく金澤了引籠り出仕を止けは四月廿四日
赤橋守時を以く御後見く大佛陸奥守維貞を以く水

判となさくふより入道ノ憤を去く解たり去ハ貞顯
四月廿六日出家を法名崇顯
金澤修理大夫貞顯々北條義時の六男亀谷五郎實泰
乃長子越後守實時乃曾孫なり父々越後守顯時と云
實泰の母ハ六浦某女々乃家謙倉乃亀谷子ありけはハ
義時了後進く亀谷禅尼と云實泰ハ淵名與一の女
を娶く實時を生くも實時とく其く祖母乃所領かふ
金澤了位せハ世々々金澤乃越後守と稱きハ好り
文永六年父實泰々七回忌了當りく一字乃真玄律院
を草創く金澤ハ称名寺弥勒院と号し入宋沙弥圓種
等と共に魔を降く怨を除らんことを終りく菩提を證

果一建治二年十月廿三日あふく率きり也を即称
名寺正慧と云實時北條相摸守政村乃女を娶り太郎
實村に所顯時を生くむ實村早世くけは顯時を以て
家督と以實時學を好む參河守清原教隆を所く
群書治要を受

群書治要卷第十四末記 清原教隆真蹟

建長七年六月十三日

蒙洒掃少尹の旨嚴命加點了

嚴守清原氏

實時曆仁元年三月十八日掃部助宜陽門院藏人小任
ま教中評定傳小見控東澄曆仁元年二月乃條小侍
同年六月の條に陸奥掃部助實時とあり宜陽門院と
ハ後何院皇女觀子内親王乃流轉あり文治八年准
建長四年六月十七日二歳に崩すあり實時去乃歳
十八歳おは建長七年乃二十二歳也掃部助のまを
洒掃少尹と云教隆真人の父永二年七月十八日京小
教隆乃清家明經乃儒者小く鎌倉より幕府小候
せしと東澄子見くすは也は實時小也子後ひく學
を受く正備ふく實時建治元年ハ又十二歳あく評定
衆一番引付頭たりし又月病る依く六浦別業子引
籍上六月乃頃ハ羣書治要乃點を寫くかときくと奥

遠治元年六月二日以勾勘本書
寫點校終印作此書一部奉之奉
後藤壹州為大番在洛之日予
依令誌所奉寫下之白於當卷
者從藤三品茂範之平之如始

早夏去文永七年極月回祿成
孽化所燼平今本若安上以
前以平本勾勘之年寫之問意
又以件本重令書寫者之

越州刺史平物

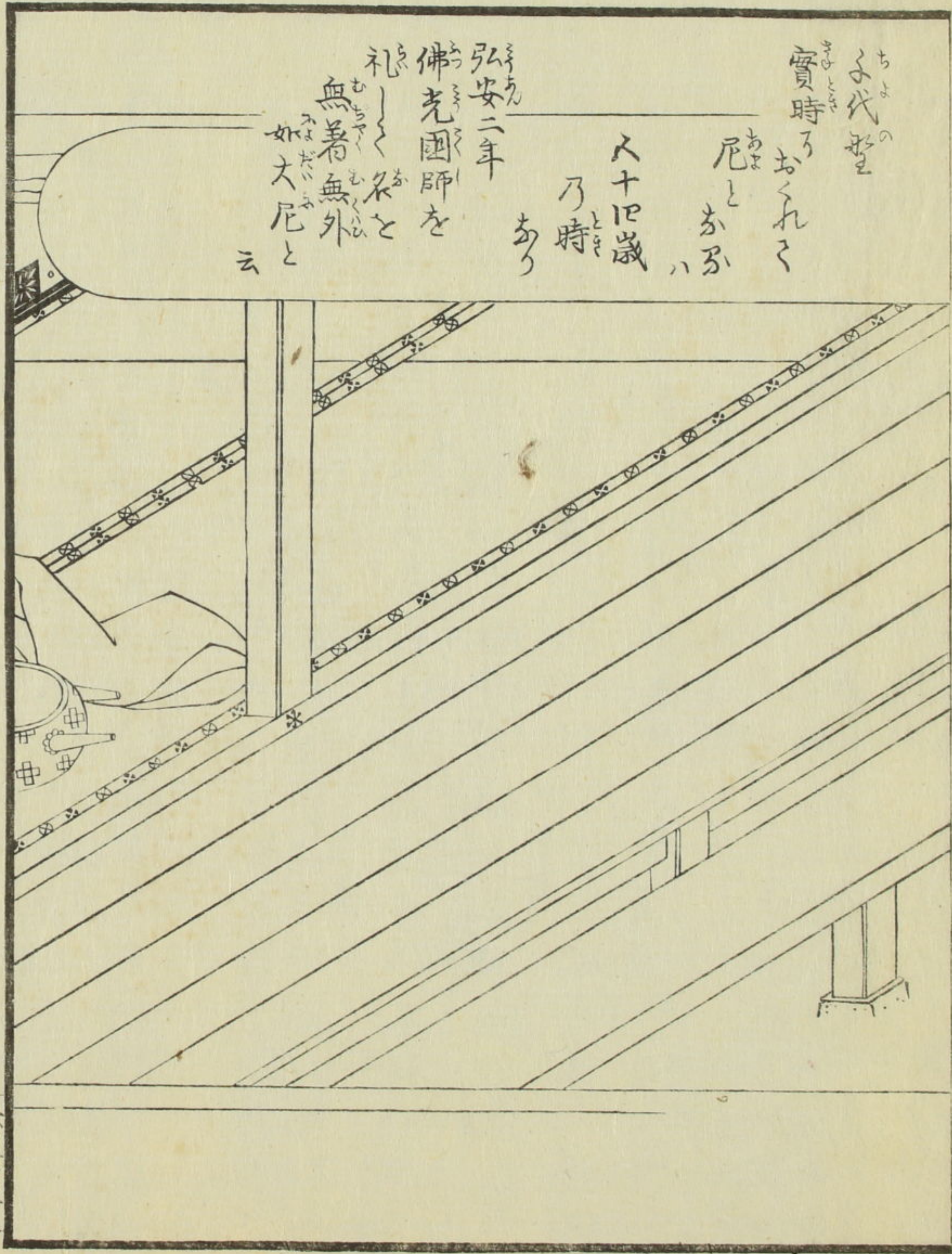
書子思之々里勾勘之ハ勘解由乃唐名亦里問注所執

事勘解由判官之善康有云後田民部大輔兼連の子
日勤解由判官任を討つ又八歳後長寺のハ壹岐守
と云え建治元年ハ四十八歳なり
基政を云細の號藤之品茂範ハ文章博士式部大
輔經範乃長男文章博士侍讀みく南家乃儒流なり
去乃跋をう實時乃學を好す一を刻へき也
實時の妻ハ無外如大禅尼と云知名子代野娘秋田
城介基乃女好城介泰盛の女如大禅尼乃傳見
盛ハ寛喜三年ふ出禪尼より八歳なり何そ
父みたらん然らハ泰盛乃父義景の女とせん禪尼
の生うと云建治二年十月廿三日實時ふ後也てハ
義景十四歳心を祖闡子思と宗乘子寄し弘安二年佛光禅
師乃鎌倉へ来ふ會ハあを持しく尼とかハ子

又十七歳その後上治し緒永識ふ冬後資壽精舍
を構えく專へつ坐究し一日井ふ新く水を汲けふ子
慮ら水桶乃籠る水乃地了覆るを見く忽然
く大悟を秋を詠しくいく
子代整うくいく冬桶乃底ぬけく水たまく孫ハ月意
屋と守めく佛光了見えく悟る如を望きハ佛光
法衣あらひ子自贊乃頂相を付與きりる同九年佛光
遷化了臨し手書を與く云汝日衣法を受く道風大
子仍ち教老懷惟法を骨髮少許里を分く汝ハ留與
以汝為子安奉しく別子小禅刹を置吾子代く分化せ
よを登くく正子力を竭しく吾志子違人とかりれと

禅尼ぜんにまふちち仁和寺にわじの東北乃のひ色をトとく梵字ぼんじを
 經營けいぎやう一萬年まんねん正脈院しやうまくわんと号と佛光ぶつこう乃の塔所たつしよと以もつ乃の院わん
 尼に遷化せんげ乃の後のち十八年じはちねん康永かうえい元年げんねん四月しがつ高藏かうざう寺じを請まねく主しゆたるむ
 評ひやうの師し直ちやく也や也やより前まへ禅尼ぜんに洛北らくほく松まつの本島のほんじま一いち字じを
 傳でんふ記きも
 建けん立りつ一いち景愛寺けいあいじと云いふ佛光ぶつこう因師いんしののち處ところと一いちは乃のち孫そん
 是利讚岐守貞氏しりせんぎしゆぢん乃のち北方ほくほう實時じつじ乃のち女むすめああくく禅尼ぜんに乃のち所しよ
 生なまあり一いちは上うへ牧民まきじん於お大捕おほとら二階堂にかいどう山城守やまぢのし等ら力を合あ
 せく淨財じやうさいを助たすといい登のぼり信しん亮りやう是利貞氏しりぢん乃のち室むろののち上うへ牧まき
 義ぎ泉いづみ清きよ子こ康永かうえい元年げんねん十二月じふにがつ廿二にじふに日にち逝し去さ行ゆ年ねん六十五むそご歳さい
 と云いふ乃のち弘安こうあん元年げんねんの生なま也やああくく禅尼ぜんに五十六ごじふろく歳さい乃のち時ときあり
 又また是利貞氏しりぢんの女むすめ貞氏ぢん乃のち室むろたりと云いふ乃のち五十一ごじふいち歳さいの時ときあり
 師し直ちやくの母はは清きよ子のこのち妹いへ勸かん徳とく寺じ別べつ當たう宿しゆく律りつ道だう道だう鬼おにののち親おや
 ののち女むすめああくく清きよ子のこのち師し直ちやく破やぶ於お大おほ伯はく母ははああくく乃のち道だう道だう鬼おにののち親おや

子こ乃のちたためめ乃のち睡すい醒せい正脈院しやうまくわんを修復しゆふく真如寺しんじよじと名なす
 ハは清きよ子のこのち姪めいたる上うへ牧まき民部じんぶ大輔たふ憲けん顯けん小せうああくく城ぢやう隨ずい喜き世せい
 るるああくく一いち思し憲けん顯けんハは禅尼ぜんに滅めつ後のち八年はちねんああくく師し直ちやくハは滅めつ後のち
 又また年ねんああくく生なま也や一人ひとりああくく乃のち景愛寺けいあいじ建けん立りつののち頃ころハは生なま也や一いち歳さい後のち
 人ひと義人ぎじん禅尼ぜんにああくく同どう也や乃のち日にち面めん佛ぶつ月げつ面めん佛ぶつと答こたへ入いれ乃のち
 あり乃のち義人ぎじん禅尼ぜんにああくく同どう也や乃のち日にち面めん佛ぶつ月げつ面めん佛ぶつと答こたへ入いれ乃のち
 かかああくく乃のちああくく乃のち日にち面めん佛ぶつ尚しやうと称なづととかかや永仁えいじん六年ごねん十
 一月いちがつ廿八にじふはち日にち正脈院しやうまくわんああくく化けと世壽せじゆ七十六しちじふろく歳さい乃のち塔たつののち院わん
 實時じつじ乃のち長子ちやうし實村じつむら早世さうせい一いちけけはは嫡孫ちやくそん顯時けんじを嗣ついで子こと以もつ以もつ
 顯時けんじと一いち先まへ越後えちごに即すなはち稱なづ一いち後のち小せう允いん近將監ぢんしやうかん入いれ任にん一いち又また
 越後えちご守し任にん一いち父ちち乃のち後のち評定衆ひやうぢやうしゆたり東鑑とうかん寛喜くわんき三年さんねん十
 相あひ列り時とき房ふ武ぶ刑けい泰時たいじ評定所ひやうぢやうしよへ氣き給たまと記しるさる乃のち幕府まくふ了り
 評定所ひやうぢやうしよを置おき一いち證しやうと云いふ一いち又また貞永ぢんえい元年げんねん七月しちがつ十日じふにちの
 系けい了り評定衆ひやうぢやうしゆ十一じふいち人ひととあり是こゝ評定衆ひやうぢやうしゆ十一じふいち人ひと乃のち各おのづか乃のち起おこれ乃のち
 同どう仁治にぢ四年ごねん二月にがつ廿六にじふろく日にち評定衆ひやうぢやうしゆ十一じふいち人ひと乃のち各おのづか乃のち起おこれ乃のち
 論ろんを聞きく執事しつじを加かへ乃のち廿六にじふろく日にち評定衆ひやうぢやうしゆ十一じふいち人ひと乃のち各おのづか乃のち起おこれ乃のち
 論ろんを聞きく執事しつじを加かへ乃のち廿六にじふろく日にち評定衆ひやうぢやうしゆ十一じふいち人ひと乃のち各おのづか乃のち起おこれ乃のち



社九人あり、附今乃目安了、音博士後隆真人
 繼詳ふ幕府職掌考ふ、音以、音博士後隆真人
 を師とす、音春秋左氏傳を受ら、音自序の末記
 越後守顯時真蹟
見

弘安元年九月廿二日以音

博士後隆真人今平去真點校了

從茲以後永無誤會

俊隆真人ハ教隆父祖乃遺書ハ更アリ我集々私書藉
 真人乃長男あり乃散佚あんを患ふく土倉を造り
 滋野貞主乃慈恩菅家乃紅梅河家乃文庫善信の文庫
 等々金澤文庫と云印を卷く不躑々納めらるる形り抑我
 邦ふく藏書り印を躑々ハ聖武皇帝乃天平十二年に
 月二十二日戊寅以内家印の御印躑々西家經三字之
 上西家經ハ彰明皇后乃御印おれと認與大家躑々印
 書不可雜亂ハ家ハ聖武亦即四字關者見印下西家
 之字應擬西家之書故他別驗永為龜鏡と云みく千百
 に年前よりちや藏書印ありと月り形り西家經の真
 觀の印を始々々々數々一顯時弘安八年十一月廿二日
 爰了辨おけむる果すと

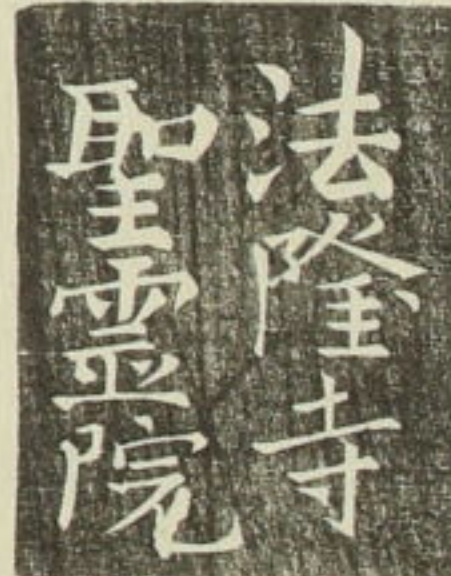
顯時藏書印

金澤文庫

承曆四年寫本心地觀經入彌ところ
後三条院長女
聰子内親王藏書
七百十四
年前
あり



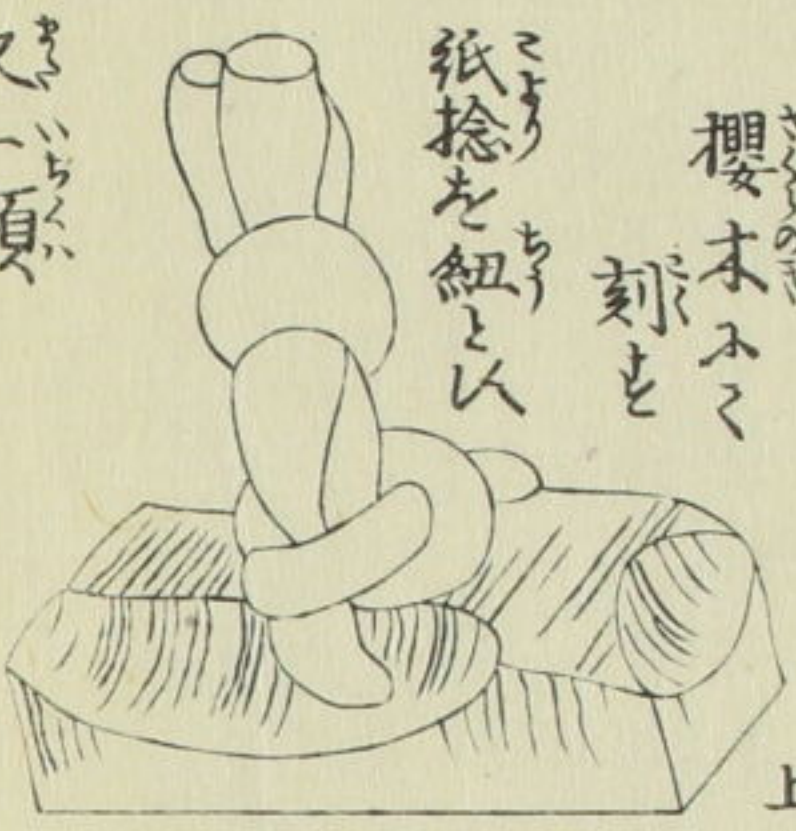
法隆寺覺印藏書印



天治年中覺印自筆
の慈恩傳入彌ところ

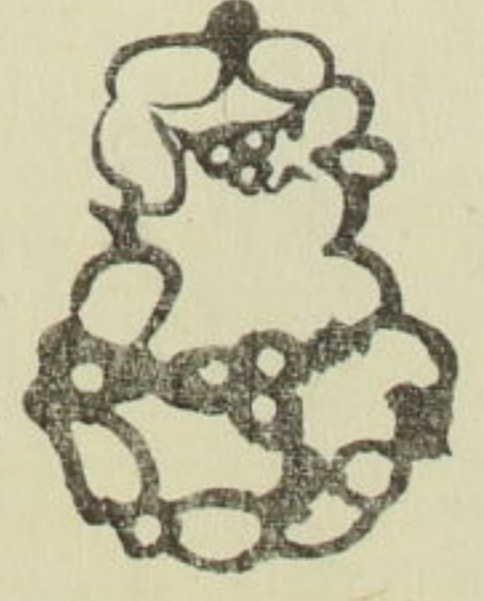
古寫大集經入彌ところ
印

柶尾明慧上人藏書印
櫻木みく
刻と
紙捻を紐とい

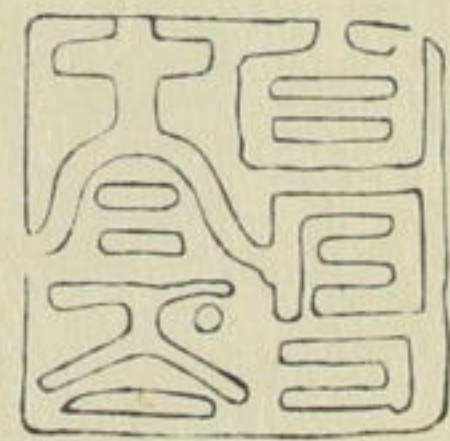


上人真跡と云

高天寺中林院藏印



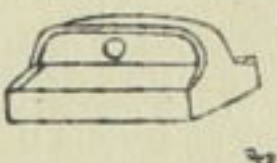
同工
柶尾明慧上人
持經
の内
あり



延喜年中寫本
四合律入白粉みて
彌ところ

高山寺

顯時より九十年許も
あると云ふり



又一顆
後鳥羽院所賜
宸翰と云櫻木
みく紐の形

評定衆を辭とく六浦了籠居く正安三年三月廿八日
以處了卒を以年四十八歳長子修理大夫貞顯次男大
僧正顯辨若宮別當たり之男ハ甘繩伊後守顯實女子
ハ足利讚岐守貞氏妻と系圖了見えく里
景愛寺の傳
妻大尼の女貞氏の妻たる所云里
貞顯乾元
時代あと以顯時の女みくハ相當と云へり
元年七月廿六日前上野介宗宣了代りく六波羅南方
小居時中務大輔嘉元四年越後守了任を地頭右大
辨之任經雄卿
日野右少辨衛尉の男也
小後く群書
流要を受法曹類林を寫くまへり九条の左衛門控佐光
經朝長ふく親くりくは自筆乃末記あり延慶三
年左馬控頭ふかき也正和元年武藏守をりけ同日

嘉元四年二月十九日右大臣之位詮雄
心奉事寫點授年此書祖父越前守時
被終一部一切之後後年少終終
仍奉加々々

從五位上行越後守貞顯

嘉元四年二月廿一日重授合年

越後守貞

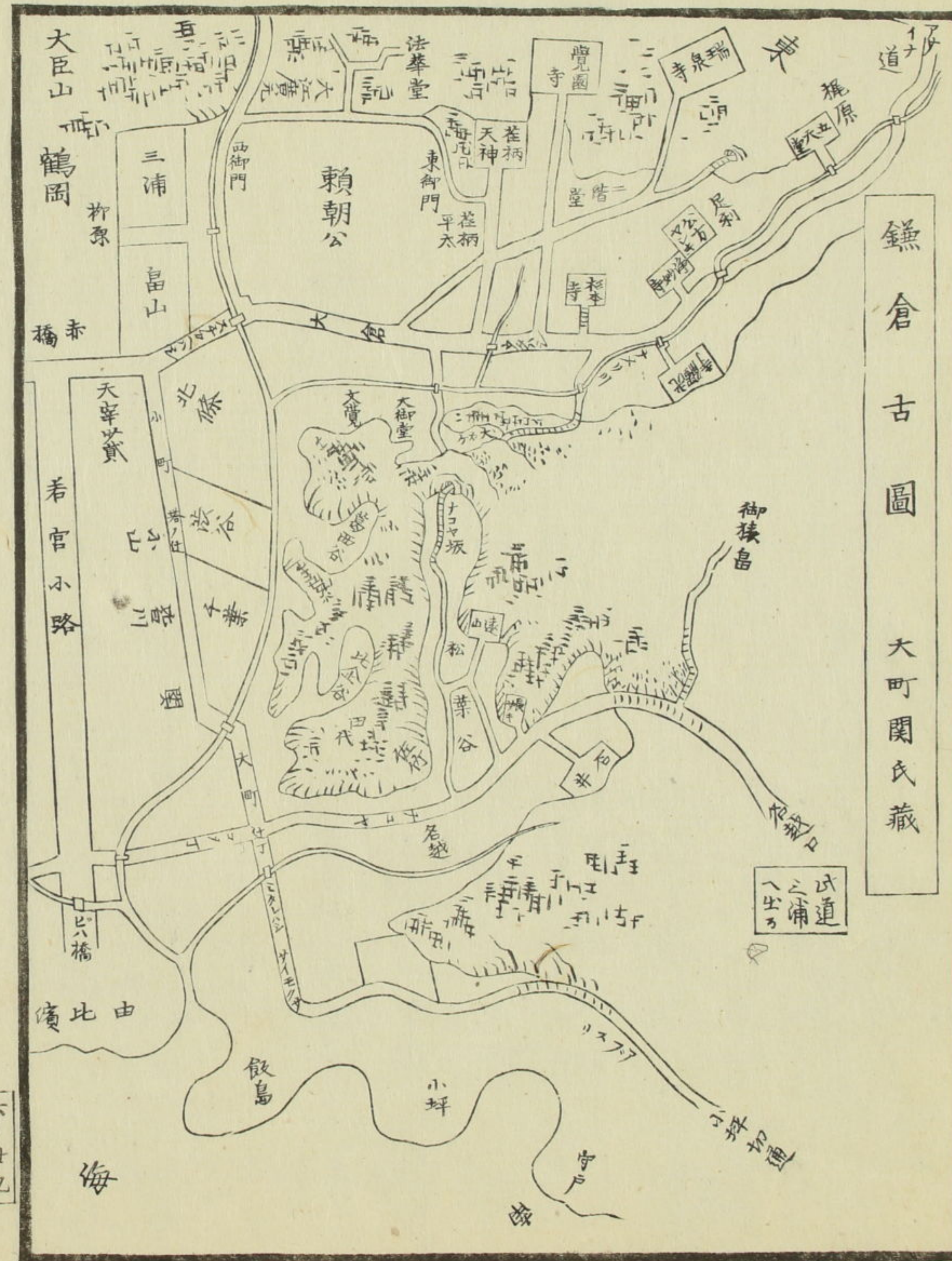
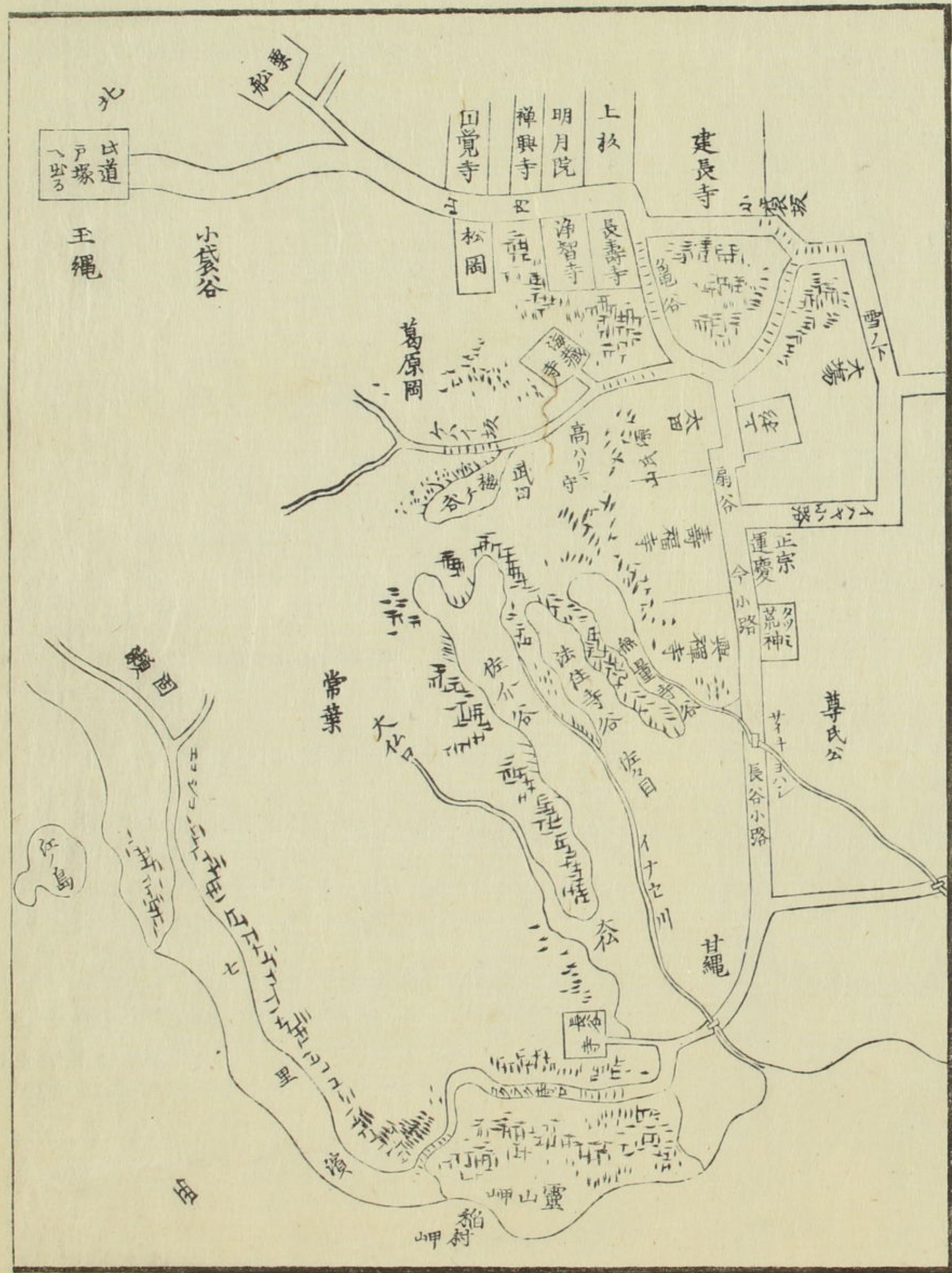
七月十一日相摸守巡時病了依々執權を辭中け色は
讚岐守基時執權不補一貞顯加判まへき中みく嘉曆
元年十二月のさく何事ふ泰家乃憤王子就く
月廿六日薙髪く崇顯と云然るふ元弘三年五月廿
二日葛西谷東勝寺不於く自殺くけり
高時乃心を取んとく我ゆくと薙髪くけ色ハ鎌倉中ハ
大名も小名も入道あぬハかうりけりかく長時高資ら

計らひあそく赤橋相摸守盛時を執持し大佛修理を主維
貞を加判とあしけむと小人心の穂やあそり元徳二
年高時入道高資を威推並ひあそを忌み長勝右兵衛尉
高頼高資を竊し討ち捨よと詔らひけふ事露せし
か罪を高頼に課せし陸奥國へ流し遣せし高頼ハ高比
後高資まむく送れし高時入道あそと由無りぬ元弘
元年後醍醐天皇鎌倉を討ちやと思食たし進一ハ大塔
乃宮尊雲法親王獻慮をたしけ糸らき進一乃武士共
へ命令をふき進一有驗乃高僧へ調伏乃修法を仰付らむ
ハ法勝倉へ関えけしハ法勝寺の圓觀小野乃文觀僧正
淨大寺乃志圓僧正を捕えて遠處へ遷し衣少辨後基朝

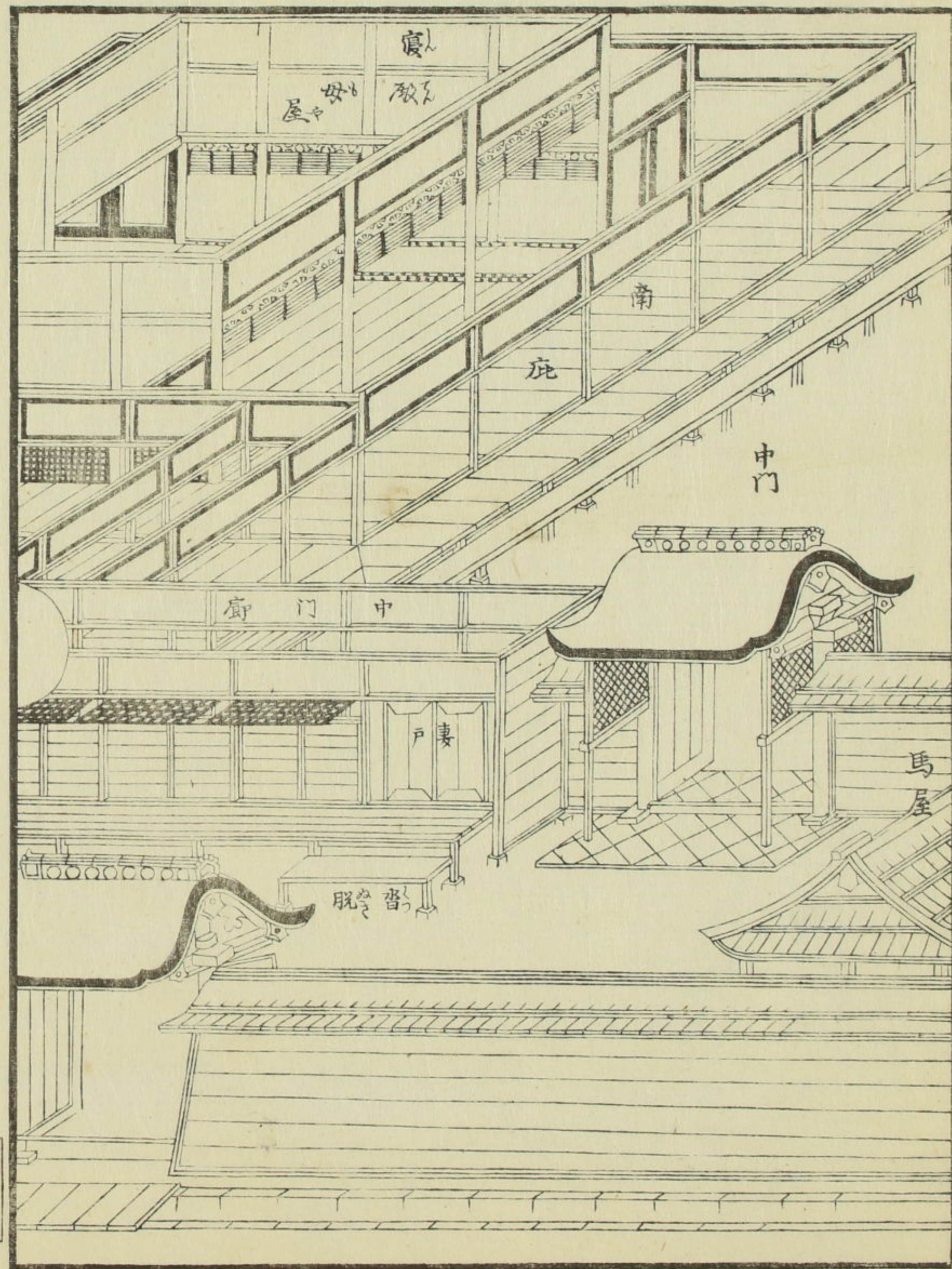
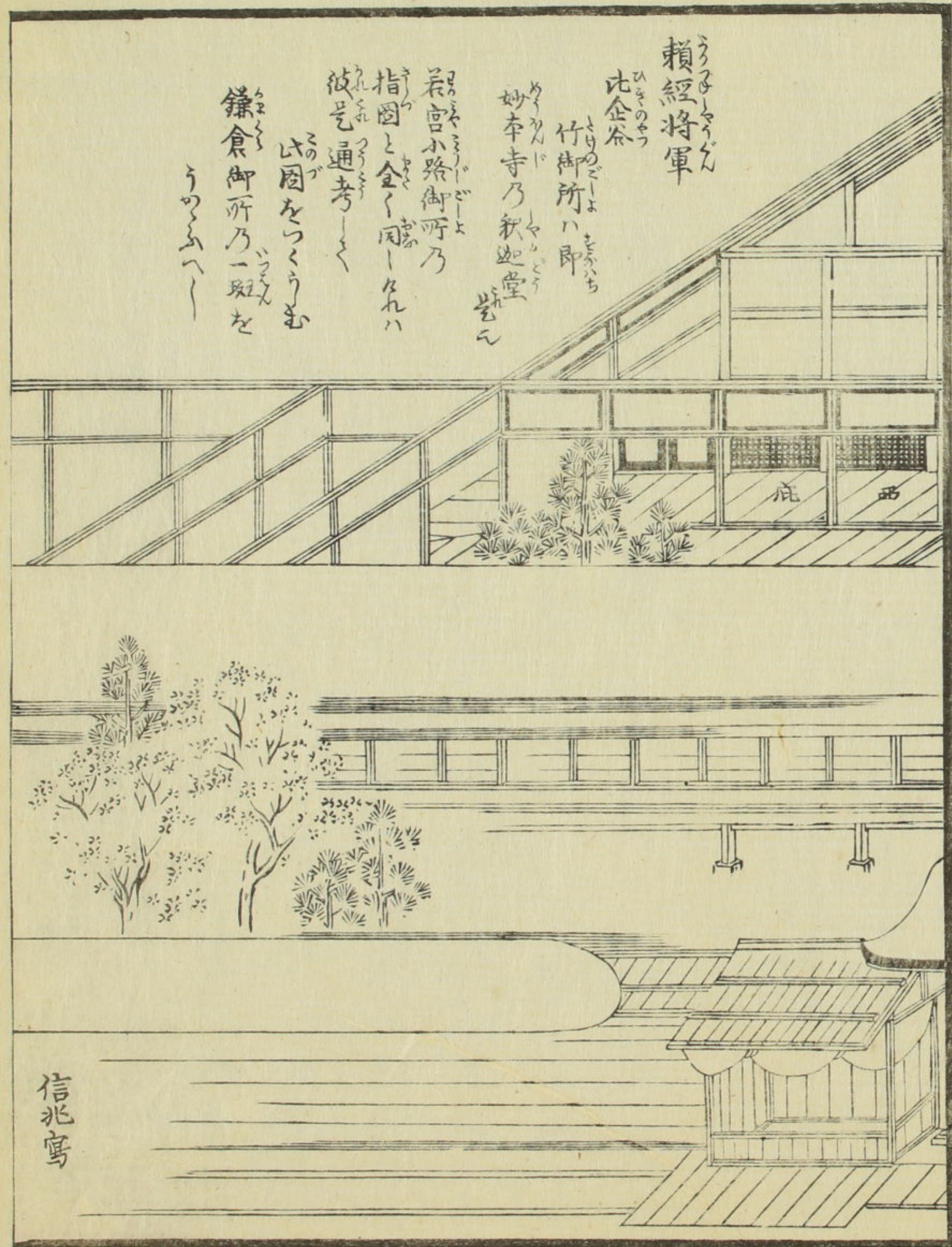
臣を鎌倉より迎へてあそを殺しそくハふと傳と諸將乃
異見を問んとせし高資無子先くち至上を遠島へ遷し
大塔宮を炸脱進乃云卿教上人を殺せしと言葉を放し
憚る色ゆかけし議らひけしハ大石を箱に互に面を見
合せ居りし二階堂貞藤諫る云く君君たるもとい魚共
臣もつと臣たるもハ有へりすと云本文あり隠謀阿順乃
卿相西三人とく不追捕せし上ハ何乃恐怖の候へし他慎
臣たふ道を盡せしあそ君由定めしと云下ハさせし入へし
ありと申けるを高資そく由あそハ文武乃用緩急勢ハ異
し孔子の道今日云へし處ハあそハ君臣乃道を守らば
子を束縛し戮し終ん乃そ早く承久の故事不従入へしと

居長高よりありて執りけし高時の道由儀子同じて二階
堂貞藤城越後を便とて上洛せしめけるを如何とて
かハ別食らん大塔宮あをを和食と主とて竊り告せら
せり也ハ主とハ置置へ遷幸ありて宮ハ吉野へ移らる給
けふ官軍利ありて主上隠岐乃島へ遷幸す海北
堀り大塔宮をよハ楠北畠赤松和以下乃官軍あり
あふ義兵を揚たりけふ天運循環一天道盈を漸たせ
ふ國々小與力の旗を立し不と北條一家の好篤りける
足利治部大輔尊氏鎌倉を出て官軍に馳かたり六波羅を
攻ると早馬を波をうりて告ありてより國々國ハ云
ふ及て以陸奥出舟乃兵士を催使ありて上洛せしめ六波羅

小力を合さんとせし新田小左郎義貞上野國ふ義兵
を擧ぐ武蔵國へ打越る中同く一ハ先迎國の叛逆人を
ふと然めくおち小京都を救するはとて金澤貞將を大
將とて上総下総乃軍兵とゆき下河邊へ打て出で敵乃
後をたち切へし櫻田貞國長崎高重ハ武蔵相摸乃軍兵
を討て大手小向入て合戦を致しとて定めけり小櫻田長治
武蔵野合戦し打負ぬとて高時入道大外駈を口郎允迎
大丈入道慧性を大將とて十萬條勢を武蔵國小差下以慧
性分陪の軍小打勝と云と分陪川原乃戦小打負て鎌倉
へ引返すとて後義貞東國乃軍兵六十萬七子條勢を率とて
後片瀬腰越ハ門ハ十餘ヶ所火をけり方より責入ハ



鎌倉古圖 大町関氏藏



鎌倉小三手了多くあをを防ぐ元弘三年五月十八日
已刻より軍々海軍互に慚あふ勇士乃命をかたりて戦
けは何彼と見えは又けるふ山内へ向くはけふ赤橋相
摸守盛時敵乃勝る衆味方乃日々落紗を見く一家の
運も今々限里と思切自害しくけしを乃手乃侍九十餘
人固く腹を切たりけりや一かき一かき破らぬといふ程
敵ふ乃肉とあま入りけりすや一方打破らぬといふ程
あまあも鎌倉中の周章大くあま付た落まぬをのそ
そあまりける又極楽寺にへ向ひ一入館次郎宗氏ハ本間ハ
城在邊つ耐ううこれと守手もこ敷敗北乃色を見きり
義貞二萬餘騎あま新子了加らり岡二十一日極楽寺ト推

寄る折しも稲村崎干瀆とありて横義射んと揃たる兵
船ハ塙了隨へく女餘所この沖に漂へり義貞軍をまくり
濱面乃五家小火を掛りけしは濱風四方吹ちりて女
餘ヶ所同時燃あま餘始終さるふ高時入道乃
屋敷了火うり志は入道千餘騎あま葛西谷東勝寺小
引義貞大佛陸奥守貞直ハ服屋義助の陣ふ蒐入り討死し
令海武藏守貞将ハ山内乃令戦了手を負たれハ東勝寺小
交詢り高時入道了眼乞志く大勢の中へを入り討死せらる
か分紗へ長勝次郎高重寄手をあま不と追散りて東
勝寺へ馳詢り今々も是を不候人手小明ら勝あひと
中もあま腹のそ破り伏り是をまき長勝圓喜由後れ

おと同一く自害あつく失け色ハ高時入道小腹より後ハぬ
年之十一さくあそ一族門葉八百七十餘人おかく被る自害
あつく星霜百二十餘年乃思徳を眞土黄泉乃下ふ報ふけ
也はそれら所後を履く六子餘人さく遠へけりち入燼乃中
へ飛入く焼燼きてそ失子らる元弘三年五月廿二日ハかる
日あ色は時を録食扱く諸人の見聞を驚りせ烏帽
子乃ためお神の綺羅を履く一瞬若炬火と立のり頼經
頼嗣西將軍をくめ宗尊惟康久明守邦乃口親王乃所時
改義時泰時時氏経時時頼時宗貞時高時九代乃繁栄大
ちまら小灰燼とあけける被るあつく墓あつく世の扱る
鎌倉小町乃北若宮小路乃東ふ金龍公寶戒寺と云圓頓

教觀乃林剎ありさかち東鑑子江間義時乃大倉の亭
と云比地あり時政もたけら愛ふ住ける又東鑑脱漏る元
仁二年十月十九日相列北條時房武村泰時冬舎せ給
將軍御所乃所地の事涉沙汰あり相人淨法所ゆ云右大
將家法華堂の下乃所所の地は神相應の地あり何そ他
所了後さあへんや頼朝屋敷と珍巻法眼云法華堂下
乃所地猶るへく寸西方の岳上る衣幕下乃所廟あり其
親の墓言くさく其下る辰時ハ子孫あつく是神本父不見
えく幕下の所子孫涉履以忽符令せむる若宮大路
ハ西小大道あり東ふ川ありあり北小鶴岡南ふ海水城
溝さくろり無双の勝地と云へ一徹く爰ふ法定と有く

嘉禎二年三月十四日若宮大路の東に御所を立らば
月二日本他り始め八月に日御後徳と云ふ地あり
時右大將頼朝治承四年十月九日大庭平景義を
奉りて頼朝兼道ら内宅を後しゆらば二十
月十二日御後徳あり大倉乃御所と云ふ今乃頼朝屋
敷あり右大庭實朝云々之代に十餘年住を移し
舊蹟あり 大庭景義の武家御事 建武二年三月廿八日
足利参儀尊氏卿後醍醐天皇へ奏聞し葛西谷東勝
寺乃焼ゆ累々たか北条一家の骸骨を改葬し法勝寺
の圓觀僧正を以て導師として一字を建三に相摸國全
日御半分を寄て香積の資を充高時入道に徳宗推現

と齋志の九原乃扶骨荊蕪と根を失る顔を起し中
乃迷魂勅勅乃愁眉を秋光乃影不閑を利生乃威力
子新永く此地乃鎮守と云々之聚浄戒乃慈眼をめぐ
らし終ふと也
武家評林系圖より高時領銀二十八万七千貫當代知り
て百四十万石不當ると見ゆるハ當代の五石を貫
と積里より好たき高時乃領銀駿河國入江庄と表後
守護職といふ平記を見ゆる也と其餘の詳あり以
さし廿八万七千貫と云ふ行不依りゆる不也疑
今考ふるに際田租元一段之百六十歩不錢之百文を以て
通價といふ 但高下まちく不いづる一貫文ハ之段百十
難依り平均して通價といふ 此邊ハ一貫文ハ之段百十

歩許乃田地歩許乃田地よりなる廿八万七千貫石九万石又千町許歩許乃田地
當之ハ駿河國田當之ハ駿河國田九千七百九十七町當之ハ駿河國田美狭國美狭國之千百二十九町
と拾芥抄と拾芥抄子見と拾芥抄るるふくハと拾芥抄後八万二千餘町と拾芥抄たり

先進備像玉石雜誌卷第六終

